



なかましんぶん

H31年1月1日 VOL94 小川和代



なかまの会から3つの柱を読み解くと・・・(太字が育みたい資質・能力 通称3つの柱)

発表の最中や一仕事を終えた子ども達の何とも言えない表情。ここから「なかまの会」を通して子ども達が学んだことが伝わってきます。緊張している顔は、責任感や、やるべきことを自覚する力が芽生えた証です。張り切っている顔は、取り組むことの意味を理解している証拠です。緊張がほどけた顔や一気に緩む姿は、それまでどんなに緊張していたかの証です。「どうだ！！」って評価を待ってるような顔は、それまで頑張ってきた自信の証です。満点の笑顔は、自分の満足いく結果をつくれた証です。お友達とアイコンタクトを取る姿は、仲間を信じて、協力し合うことの尊さを学んだ証です。

まだ十分な語彙を持たず、言葉のコミュニケーションがたどたどしい保育園世代の子ども達ですが、発表会では、1年でこんなにも多岐にわたって学んできた姿を見せてくれました。2歳児では知る由もないようなことを、どうやって5歳児の子ども達は知っていったのでしょうか。「なかまの会」は年に1回だけですが、それでも、3歳児にとっては「なかまの会」は初めてではなく経験者なのです。立っていただけ、泣いていただけ??の去年のことをちゃんと覚えていて、3歳児であっても「なかまの会」が何なのか、自分なりに分かっているのです。その理解から、次の自分の行動指針を自分で選び、実行していきます。2歳児の緊張・3歳児の緊張・4歳児の緊張・5歳児の緊張。同じプレッシャーでも、その発達段階がそれぞれ違ってきます。幼い時の「いつもと違う緊張感」はやがて、それを乗り越えていき、5歳児になると「発表する」という私たちの緊張感と同じような物に成長しています。『知識及び技能の基礎：豊かな経験を通じて、感じたり、気づいたり、分かったり、出来るようになったりする』

「物語を作る、衣装を作る、ステージを演出する。」なんていうことも2.3歳で十分にイメージの世界の主演になって遊びこむことをしているうちに、4.5歳になると自らイメージを膨らませ創作する、イメージを形にするために創意工夫をする、イメージを共有するためにコミュニケーションが成長していきます。『思考力・判断力・表現力等の基礎：気づいたことや、出来るようになったことを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする』

「なかまの会」の練習の日々は、子ども達にとっては受験生の気分を味わっているようなものかも、遊びたいのに、〇〇をやらなくてはいけないことはわかっている・・・でも遊びたい！！えーい遊んじゃえ！・・・やっとならばよかったかも・・・この繰り返しは、次の自分の行動指針を組み立てていく経験になります。優先順位を考え時間を使う思考力は、実はもう芽生えています。やりたくないけどやる。みんな決めてないと、1人では決めていけない。緊張するから、安心できないから最善を尽くす。こんなことも、すべて経験の産物です。『学びに向かう力・人間性など：心情・意欲・態度が育つ中で、より良い生活を営もうとする。』

発表会が終わった直後の日誌より、「ようやく練習しないで外に行ける～！！」と喜びながらどこに行き、何をして遊ぶか話し合う。保育者が「練習嫌だったの？」と問うと、「そうに決まってる！」と皆口をそろえて言っていた。「練習しなくてもよかったのに」と言うと、「だって練習して確認しないとなか

まの会ちゃんとできないでしょ！」と返事が返ってきた。そして今、5歳児はドッチボール大会、4歳児は来年の運動会、それぞれしっかりと次なる目標を持っている。

目標って力強く背中を押してくれるものですね。苦難を乗り越えられる原動力。そんな目標を持てることはとても幸運なことですよ。でもそれは、ただのLUCKYではなく、そう生きる力をつけていか、否かなのかもしれないね。そして、その道筋は、0歳から5歳までの間に既に始まっています。既製品を作るように、あるべき姿に近づけられるように教えられ学ぶ（課題を与えられる学び）なのか、自分オリジナルのオーダーメイドを作るように自分で考えなりたい自分になっていく（自己課題体験的学び）のか、5歳までの延長線上にしかその子の未来はつながっていかないものだろうな、と0歳から5歳に育ちゆく子ども達の成長の道筋の姿から、私が感じ学んだことです。

家族から10の姿の育ちを読み解くと・・・（太字が幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿）

（社会生活との関わり：家族を大切にしようとする気持ちを持つとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみを持つようになる。また、保育所内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を利用するなどして、社会とのつながりを意識するようになる。）

何やら難しい表現ですが、こども達のそれは日常にちりばめられています。例えば、自分のお母さんが妊娠している姿、友達のお母さんが妊娠している姿、先生が妊娠している姿から、こども達は実に様々なことを感じ取っています。その自分の感じたことを通して「赤ちゃんの誕生」という事を知っていきます。年長・年中クラスはちょうど下の子が生まれてくるようなタイミングなので、クラスのあちらこちらで開かれる井戸端会議の話題に赤ちゃんが上がる事も珍しくありません。「男の子かな?」「女の子かな?」「男がいいに決まっている!!○○一緒に出来るし!」「女がいいに決まっている!男ばっかしになっちゃうじゃん!!」「男の子は大変なんだよな~!!」おにいちゃん、おねえちゃん予備軍はパパやママの思いに負けないくらいの「愛」を生まれてくる赤ちゃんに注ぎ始めています。予定のない子たちも一緒に語り同じように育っていきます。生まれてからは、うちはもう○○ヶ月とか、離乳食とか、寝返りとか・・・子ども達の日常会話です。（小さな親たちです）その傍らで、赤ちゃんのいない家庭の子たちも、同じように心持は感じ育っていくのです。出産妊娠育児は親の仕事だけではないのですね。この日常からこども達の愛ややさしさ、こどもをあやす技術、情報交換をして知識を得ること、何より大切な家族の一員としての自覚と責任感が育っていくのです。

お正月は帰省した家庭も多いでしょう。おじいさんおばあさん、おじさんおばさん、いとこたちとの関わりからも、こども達はたくさんの関係性や関わり方、伝承、それぞれの家庭の雰囲気の違いを感じ知っていきます。0歳の赤ちゃんだって、そのアンテナは鋭く冴えて、ちゃんと人によって自分の出し方を変えているのが分かる事でしょう。教えられて分かる事はほんの少し、あいさつや行儀作法など、それ以外のいろんなことを子どもは自ら試し確信をもって知っていきます。そして、たくさんの人に愛される自分の存在を、価値ある自分として刻むことでしょう。この心情が、将来にわたり自分自身を支えていく土台になります。家庭の文化こそ、親がこども達に残せる価値ある資産ですね。